

氏 名	ツカダハナエ 塚田花恵
学 位 の 種 類	博 士 （音楽学）
学 位 記 番 号	博 音 第 203 号
学位授与年月日	平成24年 3 月 26 日
学位論文等題目	〈論文〉1830年代フランスのピアノ作品レビューにみる器楽観の変容 ー『ピアニスト』誌と『ガゼット・ミュージカル・ド・パリ』誌を 中心にー

総 合 審 査 委 員

(主査)	東京芸術大学	教 授	(音楽学部)	土 田 英三郎
(副査)	〃	〃	(〃)	片 山 千佳子
	〃	〃	(〃)	大 角 欣 矢
	〃	准教授	(〃)	福 中 冬 子
	桐朋学園大学	教 授	(〃)	西 原 稔

(論文内容の要旨)

本論文の目的は、1830年代のフランスの音楽雑誌に掲載されたピアノ作品のレビューにおいて、器楽作品の受容のあり方がどのように変化したのかを、明らかにすることである。フランスにおいて1830年代は、ベートーヴェンの交響曲が重要な演奏会レパートリーとなり、器楽作品をどのように聴くかということが問題になった時期であった。ピアノ作品レビューを考察の対象とするのは、この時期にピアノが普及し、音楽雑誌に作品解説が掲載されるようになったためである。作品と受容者を媒介する解説の誕生は、ピアノ愛好家の演奏・聴取体験を大きく変えるものであり、「聴くことの社会的規律化」(R. Leppert) を考察する上で重要な対象と考えられる。

本論文で対象とした音楽雑誌は、1833年創刊の『ピアニスト *Le Pianiste*』、及び、翌34年に楽譜出版者モーリス・シュレザンジェ Maurice Schlesinger が創刊した『ガゼット・ミュージカル・ド・パリ *Gazette musicale de Paris*』(以下『ガゼット』と略称) である。これらは、19世紀のフランスにおいて、ピアノ作品レビューの掲載を始めた最初期の音楽雑誌と位置付けられる。本論文では、これら二誌のピアノ作品レビューについて、①ピアノ音楽のジャンルの中でどのような作曲家の作品が重要な位置付けを与えられていたのか、②それらの作品がいかなる観点から分析・批評されたのか、③その評価の背景にはいかなる音楽観があったのか、という三点を明確にすることを、具体的な課題として設定した。

第一章では、『ピアニスト』誌のピアノ作品レビューを検討した。この雑誌の実質的な編集者は、シャルル・ショリユー Charles Chaulieu と考えられている。彼はパリ音楽院でルイ・アダン Louis Adam にピアノを師事した音楽教育家であったため、この雑誌では、アダンをはじめとする18世紀末から19世紀初頭にかけて活躍したピアニストたちが、フランスのピアノ音楽の「古典」として重要視されていた。その中でも特に高い評価を与えられていたのは、デュセックであった。ショリユーは、デュセックのピアノ音楽について、感情の表現において「歌 chant」(声楽的な旋律) が優位性を保っている点を評価した。ここには、声による感情の模倣という、バロック期からの伝統的な音楽思想を見ることができる。注目すべき点としては、上述した評価の基準が同時代のピアノ作品にも適用されたことである。例えば、チェルニーやアンリ・エルツの作品レビューにおいては名人芸的な技巧が、ショパンの作品レビューにおいては独創的な和声が、「歌」を妨げるものとして批判された。

第二章では、『ガゼット』誌の編集責任者であったモーリス・シュレザンジェについて、彼のピアノ音

楽レパートリーの特徴を考察した。出版カタログ等の史料の調査から、ベートーヴェンを初めとするドイツ・オーストリアの作曲家の器楽作品と、ロッシーニなどのオペラの編曲作品が、共に重要なピアノ音楽のレパートリーを構成しており、「二つの音楽文化」(C. Dahlhaus) が並存する状態にあったことが判った。シュレザンジェが出版したピアノ作品の中で、『ガゼット』誌が積極的に採り上げたのはショパン作品であったが、その宣伝のあり方は上述したようなレパートリーの状況を反映していると言える。この雑誌の批評家はショパン作品が「芸術作品」としての高い価値を有していることを説明したが、その中でも、ポピュラーなジャンルの変奏作品 (Opp. 2, 12, 13, 14) に高い評価を与えていたのである。そこには、多くのピアノ愛好家を読者に取り込もうとするシュレザンジェの意図を見ることができる。

第三章では、『ガゼット』誌が掲載したショパンの変奏作品のレビューについて、検討を行った。この雑誌の批評家は、ショパン作品とヴィルトゥオーソ的な変奏曲との差異を強調した。そして、ショパン作品を、それぞれの変奏が多様性を獲得している点、そして全体が動機によって統一されている点において、賞賛した。変奏作品全体の統一性に対する評価は、当時のフランスにおいては特異な観点であると考えられるが、A. B. マルクス Adolf Bernhard Marx の変奏曲観と共通するものである。これらのレビューは、フランソワ・シュテーペル François Stoepel が執筆した可能性が高いが、彼はプロイセン出身の音楽批評家であり、『ベルリン音楽一般新聞 *Berliner allegemeine musikalische Zeitung*』に寄稿もするなど、マルクスと関係が深かった人物である。シュテーペルは、『ガゼット』誌に寄稿した論文において、器楽作品を作曲家の精神の顕現として説明しており、ここにはドイツの音楽思想の影響を見ることができる。

以上のとおり、1830年代フランスのピアノ作品レビューには、感情模倣論から、作品を作曲家の内面の表現として捉える近代的な音楽観への移行を確認することができた。その中でも、『ガゼット』誌のショパンの変奏作品のレビューは、当時のピアノ愛好家に近代的な器楽作品受容の枠組みを与えたという点で、文化史的意義を有していると言えるだろう。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、1830年代フランスの二つの音楽雑誌『ピアニスト』『ガゼット・ミュージカル・ド・パリ』におけるピアノ作品、とりわけショパン作品の批評の読解を通して、当時器楽作品の受容のあり方が、伝統的な旋律重視の聴き方から、ドイツ的な器楽観の影響を受けて、作品を作曲家の内面の表現として捉える近代的な音楽観に変化したことを指摘しようとしたものである。

数ある先行研究の情報を背景に、当時のフランスの音楽雑誌や『ガゼット』誌の出版元であるモーリス・シュレザンジェの出版目録など、多数の一次史料を吟味した労作である。特に、2誌の内容を詳細に調査し、対照的な批評傾向を明らかにしたことは高い評価に値する。

しかし、1830年代フランスのピアノ作品批評という対象設定はともかくとして、論述の前提となる19世紀前半のフランスにおけるピアノ音楽そのものやジャーナリズムの状況の全体像について記述が十分でないため、採り上げた2誌の位置づけが分かりにくい。他誌の傾向も把握した上でこの2誌に代表させたはずなのに、そのことが論述に十分反映されていない。『ガゼット』誌の批評が「当時のピアノ愛好家に近代的な器楽作品受容の枠組みを与えた」ということを結論とするのなら、『ガゼット』誌自体がフランス音楽界や読者にどのように受容されたのか、その影響についても検討すべきである。また、個々の批評について論じる前に、まずこれら2誌の全体像を明らかにするべきであるが、記述はそうっていない。『ガゼット』誌におけるショパン作品への高い評価を意味付けしようとしたのはよいが、批評の分析は解説の域を出ず、言説の業界的あるいは政治的背景についての考察がほとんどなく、全体に箱の中だけの議論になっているため、当時のフランス音楽文化史の構築にはあまり寄与していない。「受容」をはじめ非常に複雑な現象に対する原理的な問題提起がなく、概念の問題化という博士課程の研究に相

応しい態度があまり見られない。

個々の論点で言えば、『ピアニスト』誌が保守的であるのは分かるとしても、「声による感情の模倣というバロック期からの伝統的な音楽思想がまだ息づいていた」と言うにはもっと論証が必要である。シュレザンジェの活動を詳しく辿り、彼の出版楽譜の全体像を明らかにしたのは大きな寄与の一つであるが、ピアノ作品とりわけエール・ヴァリエや編曲もののジャンルが多いことは現在の音楽史学の常識から見て想定内であり、それほど意外な分析結果ではない。『ガゼット』誌の分析はショパンの変奏作品に限定されているが、流行のポピュラーなジャンルでショパンの芸術性が高く評価されたことを明らかにするためだとはいえ、いわゆる「芸術的」なジャンルの作品の批評も視野に入れるべきである。シュレザンジェの楽譜商と雑誌がA. B. マルクスに代表されるドイツの器楽観の影響を受けているというのは重要な指摘であるが、これを実証するためには、批評執筆者のF. シュテーペルとマルクスらとの関係をもっと調査する必要がある。器楽観の変化を検証するということであれば、ピアノ作品以外にももっと目を向けるべきである。

全体にあっさりと結論に行きすぎる傾向があり、またその意味付け、結論後の論議がなさすぎる。せっかく先行研究の成果を批判的に継承しているはずなのに、その歴大な背景と情報が論述上で存分に活かされていないのは残念である。

このように問題点は少なくないが、有力2誌を詳細に調査し、限定的ではあるがショパン作品の批評の実態を提示し、1830年代フランスの音楽批評における新しい動向の一端を明らかにしたことは、博士課程の研究に相応しい学術的な貢献である。よって合格とする。